

家庭を作つた。ヘルマスは其の披露の宴を「歡樂窮極の宴」と稱へた位満足してゐる。

日は重なり、月は進んで家庭の和樂は薔薇の新芽のやうに繁く加つて行く。やがて兩人の間に小兒が出来た。大家の世嗣としても耻しからぬ丈夫な綺麗な男の兒であつた。心榮も薔薇の花と美しい兒であつた。幸福は幸福に相踵いで、希望は一つ一つ現實となつて来る。富も名も美も愛も平和もヘルマスの心には包み切れないまでに溢れに溢れた。

不思議にも溢るゝ歡樂はヘルマスの身に却つて荷厄介となつて来た。不満を充たすにはもつと何か必要であるやうに思はれてならない。物足りない。然し何處に其の感情が潜んでゐるのか解らない。今望む幸福の最高頂は如何して知られやう。ヘルマスは頻りに焦慮つてゐる。

充ち満つる歡樂の下には不安の煙がちらり／＼と燃え始めたのである。何

か物足りない感じがある。庭の小亭に小兒を遊ばせながらヘルマスはアセナイスに心の底を打明けるのであつた。夏の夕ぐれ園の中には音楽が奏でられてゐる。けれども琵琶手、聲樂師は主人兩人に暇乞して今し方歸つた後である。鳥は葉蔭に節整はぬ歌を唄つてゐる。どう口を切らうとヘルマスは暫く打沈んだ。

「御互に此の上もない幸福な身の上だ。ねえアセナイス。市の向ふの海の底よりも深い幸福な身の上だ。けれどもまた何だか物足りない。もつと何だか愉快なものがありさうだ。幸福の絶頂にはまだ程遠いやうに思へる。一等の愉快は何だらう。斯う思ふのは迷ひかな。迷信かも知れない。昔話の主様が榮華の報いが恐ろしいと言つて玉璽を海に投げ込んだやうな迷信かな。つまらない擔ぎやだらう。けれども私は何だか斯う胸へ鉛でも結び着けられたやうに苦しい。まだ氣の着が手にゐる事が何かあるやうだ。お



前は其様思へないかい。何か好い工夫は無からうか』  
とヘルマスは言ふ。

『左様で御座います。私も其様な思ひも致します。物足りないやうな。是れぞと申して取り留めて言ふ譯には参りませんが……さう是れは萬事に勿體ないと云ふ心が先に立たないからかも知れません。勿體ないと云ふ心がなければ何でもが無益くなりませう。私どもは其の心が無いからませうよ。どうかして其の心にならうぢや御座いませんか。ねえ御前。では小兒も一緒に連れて参つて、神様に萬事の御禮を申上げる事に致さうぢやありませんか』

と妻は答へた。

ヘルマスは小兒を抱いた。そして園の中の植込みへ妻と並んで入つて行くと咲き亂れた花に半ば埋もれて建ち朽された宮があつた。何かの像は草の中

へ打ち伏せに倒れてゐる。兩人は手を結び合ひて其の前に立つた。小兒は父の片方の腕に抱かれてゐる。

茜色の空はサインレンスの樹の尖つた頂に輝いてゐる。暮色はだん／＼足の下に迫つて来る。静かな星は蒼空に閃めき初めた。萬籟寂として音もない。此れを無念無想の境である。ヘルマスは低く澄んだ聲で古い節に合せて呟くやうに歌ひ始めた。

『曙の光、夕の陰、滴る星の輝きにつれて、地と海と空と、晝夜の國とは美はしく輝きぬ。樂の音色の様々や、包まる極意を見聞感覺する我等の胸に宿る生命は増しても美はし。異性の靈魂を一つとし、愛の潮は兩つの生命を混き交せて、星の光を湛へつゝ、澄み渡りて流れ行く。其の戀こそは實に生命に増して更に美はし。地は廣し、我等は富めり。萬物は皆我等のものなり。うちなる生命は淵と



深く限りなし。底ひなくも深きは戀ぞ。歌はで止むべき。  
 來れ戀よ。語のきはみ、平和の花よ。とく來れ。我等の胸をかき開き、其  
 の喜びを加へつゝ、高く高く運び行け。

萬づの賜物、缺けなき賜物。世界と生命と戀とのために、我等は讚美し、  
 我等は祝し、我等は感謝……」

空を飛ぶ鳥が征箭に射落されたやうにヘルマスの歌ははたと止まつた。其  
 の感謝を受ける相手は何處にあらう。前程唯だ黒暗々無明の雲！

ヘルマスは姿を求めた。けれども眼に入るものは虚空である。手を求めた。  
 けれども握り得たものは虚無である。感情は高調して心臓は狂ひに狂つて波  
 を打つ。振りに振る警鐘は轉々して胸の中に鳴り響く。けれども調子は少し  
 も取れない。泉のやうに湧き起る感情は、雪と冷たく雹と凍つた天からつき  
 返されて向ける所がない。幸福とは何であらう。ヘルマスには何の意味もな

くなつた。幸運はヘルマスの前へは閉ぢたる扉、氷の壁である。

「もう歸らう。重くなつた。小兒を寝かしてやらう。それから圖書室に行つ  
 て見やうぢやないか。寒くなつたやうだ。間違だよ。生活を感謝するなど  
 は夢に過ぎない。感謝を受けるものが無いぢやないか」

とヘルマスは妻に向つて悲しさうに言つた。  
 夜の幕はもう庭園を包んで了つた。

(五)

「金柱館」は其の後外觀何の變りもなかつた。平調で典雅で榮耀な様は萬事  
 昔のまゝであるけれども、内部には目に見えない變動が起つてゐる。物足り  
 ない。不満の感情は彼の夜からヘルマスの胸に膨り着けられた。

「ダンンの森」で會つて以來會て見なかつたあの老人が不圖其の翌日に此の



家に現はれた。宛然呼び寄せられて客に招かれた姿である。

ヘルマスは此の老人を歓迎しない譯にも行かなかつた。幸運を與へた恩人に對する尊敬と欣慕の情を獻げるに勉めた。けれども失敗である。マルシオンの薄氣味悪い笑顔が如何にも陰險で、尊敬心を傷けるのであつた。マルシオンは不思議な實驗をする科學者のやうな考へでヘルマスの舉動を注意してゐた。其の變化した心が何時まで續くか、どういふ風に働くかと、生活を解剖して研究する學者のやうな態度で面白さうに觀察してゐた。

ヘルマスはマルシオンが前にゐると一種憎惡の念を促される。其の冷笑を湛へた口と長い髯の上から射るやうに輝く落ち着いた冷酷な、宛然探偵のやうにぐるぐる睨め廻す眼を見ると、憤怒の情が我れ知らず込み上げて來るやうに感じた。

ある日ヘルマスは書齋にマルシオンと相對したとき、堪り難ねて、

「何故、貴老は不思議さうに私を御覽になるのです。私に何か變つた處でも

ありますかね」

と詰問した。

「ナニ別に……唯だどうも見覚えがあるやうなので」

とマルシオンは答へた。

「見覚え？」

「いや、昔「ダフソンの森」で煩悶してゐた少年と好く似てゐる」

「其れが何で不思議なのです。當然ちやありませんか」

「其の當然の事を珍らしがるのが人間の癖ぢや。珍らしがつたのが抑もお前さんの御叱を被つた原因ぢやて。お前さんは乃公に向つて秘密が守れると思はつじやるかな」

「御冗談おつじやつちや困ります。私の一部始終は貴老は精く御存じでしせ



う。何も秘密なんかありません』  
 『左様人間以外の秘密でもなからうさ。お前さんは乃公が約束したものを貰つて荷厄介にしてゐるぢやらうがな。どうも此の芝居はお前さんにや勝荷ぢや。馬鹿々々しいな。何ぞ外にやつて見さつしやるかな』  
 老人の質問は臙ろに明るい室へ入つて来たものが急に反射鏡の前に立つたやうであつた。不意に光線が眼に入つた。其の顔色は側にあるものにも明らかに讀まれた。

『おつしやる通りです。私は最早飽きくしました。私は唯だ父がやつてゐるだけの事をやつてゐるばかりです。唯だ衣食に贅を盡してゐると云ふばかり何も珍らしい事はありません。誰でも唯だ此れだけの事ぢや皆飽きて物足りなく感ずるでせう。何かやつて見たい。此の世界を驚かすやうな事がやつて見たい』

『いや御光、お前さんの言ふ事は乃公の意中を探り出したやうぢや。珍らしい愉快な機會を取り逃がすほど痴氣な事はないわい』  
 と老人は言つた。

其の日からヘルマスは平靜のない煩悶、無窮の不安に驅られる身となつた。遂に生活の頂點に達して、平安喜樂の坂を登り詰めてゐる。此の上はもう現狀を以て平坦に進むより外はない。さもなくば恐く坂の降り口とならう。それももう近い所で下り坂かも知れない。少なくとも長くはないのは確であらう。此様な有様から一日一時間でも動かうといふのは狂氣の沙汰である。折角得た此等を失ふのは身を亡ぼすに等しい過誤である。ヘルマスは何時までも其の現狀を守つて樂むべきであらう。此の世に於てヘルマスが有する以外のものの在るべき筈がない。けれどもヘルマスのまだ経験しないものが世には澤山あることは確かである。



種々の計畫の下に『金柱館』には新たな事業が起された。一層華麗な装飾はコリント、ロオマ、アレキサンドリアから召し寄せられた美術家たちの手で施された。途方もない贅澤な宴會が開かれて、食堂は歴々の客で一杯となる。華麗な装飾は萬人の羨望讃歎する所であつた。蜜蜂は花園の巢の周囲をぶん／＼と飛び廻つてゐる。歡樂を求めて牛飲馬食する人間と云ふ羽蟲や、甘きに集かる貪食の蠅蟲共、倍ては食客、食潰者、封閑、お饒舌の情氣者の群は、ヘルマスの周囲の光を訪ねて躍りつ跳ねつ狂つてゐる。

ヘルマスの仕る事、爲す事、悉く成功をしないものはなかつた。コオカサスの方へ地面を買入れると、其處から緑柱石が見着かる。イタリイの方へ商船隊を出すと途中で積んだ穀物の値が三層倍に騰貴する。皇帝の方へ政治的運動を試みた結果はアンテオケの知事に任命せられる。ヘルマスの名は成功の呪文になるかと疑はれた。

アセナイスは心に不安のあるにも拘はらず、其の顔の美はしきは年と共にいよく發揮せられて來た。『ヘルマス夫人のやうに美しい』と云ふ語が出来來る。『ヘルマスの若様のやうに綺麗だ』と云ふ語も出來た。小兒は榮華のうちに瞬間に成長した。年は早や九つで、體はしやんとして手足が丈夫で、眼は澄み渡つてゐる。其の頭はもう父の胸まで届くほど伸びた。『金柱館の寶』でヘルマスの自慢の種であつた。

此の年ヘルマスの溢るゝ益には又一滴の喜びが加はつた。豫て大事に訓練させた愛馬が、アンテオケの馬車競争に一等を占めたのである。審判官から氣も留めないといふ風に賞品を受取つたヘルマスは、一應場内を一周して勝利を一般に示す積りで、其の自慢の小兒まで馬車の中へ抱き取つた。今得意の頂點に達した。其の無類の綺麗な小兒は父の腕に掴つて揺れる馬車の上へ應揚に並つてゐる。馬車は今圓を描いて、劇場も割れるばかりの喝



采に送り迎へられつゝ走つて行く。數萬の觀客の賞讃の聲は波のやうに漂つてゐる。

「萬歳！、ヘルマス君萬歳！、小ヘルマス君萬歳！」  
と群衆は叫ぶ。

拍手喝采の颯風を不意に浴せられ、眼の前に無數の袖を翻されて、馬は驚いた。驀然に走り出した二匹は馬銜を振りつゝ、左の手綱をぶつり切つた。勢ひに伴つて馬は右に折れた。がり／＼と捻じ向けられた馬車は劇場の石の胸壁にはつしと衝突して、同時に一方の車は碎けた。軸は大地に落ちて車は斜に傾いたまゝ揺れながら引きずられて行く。

ヘルマスは一生懸命に右の手綱を引き締めながら、危くも御者臺に踏み止まつてゐる。けれども小兒は最初石垣に衝突したとき馬車から投げ出されて胸壁にしたたか頭を打ち着けた。ヘルマスが驚いて振り返つて見たときは既に

に、筆つた花のやうに砂場に倒れてゐた。

(六)

一同は小兒を擔架に乗せて『金柱館』に運んで、アンテオケ一等の名醫を迎へた。時は追々経つたけれども小兒は死んだやうに静かである。ヘルマスは夜明を待つ病人の心で、百合の蕾のやうに堅く閉ぢた小兒の臉を眺めてゐる。やがて臉は開いた。けれども其の眼は熱に燃えて唇からは取り留めもない譫語を口走るばかりである。

莊麗な然かも今日は濕り勝な家のうちに、小兒の聲は引つ切りなしに響き渡つた。或るときは金切聲を上げて笑ふやうに昂ぶるかと思ふと、又或るときは衰へ果てたやうに沈んで行く。星は輝いて又姿を沒した。太陽は昇つて又沈んだ。鳥は囀つて又叢の中に眠つた。然しヘルマスの心に歌はない。



花もなければ光もない。唯だ言ふべからざる懊惱と寂滅を待つ心細い恐怖のみである。

ヘルマスは夢に魘された人のやうである。恐ろしい形もない影が段々身に迫つて来る。けれども留まる方も遁げる力もない。如何する事も出来ぬ。唯だ黙つて成り行きを待つ外はない。

室の内を彼方此方と歩き廻つた。小兒の床が後になると離れるに忍びないやうに駈け戻る。駈け戻つて見ると近づくに堪へないほど痛々しく感ずる。家内のものは妻さへも其の失望落膽した顔を見て語を掛けるのを遠慮してゐる。

待ち遠しい日を送つた次には圖書室の中に閉ぢ籠つた。油の盡きた燈は油煙を立てながら消えて了つた。毎日注意して掃き清められた室も芥が積つて一層氣を腐らす。セオリタス自筆の貴い著書も床の上に投げ出されて、ヘル

マスは宛然節々から活氣の抜けて了つた人間のやうに椅子に腰を卸してゐる。暗の中から誰やら近づいて来た。けれども頭を擡げやうともしない。手が肩に觸れた。温かい柔かな腕は其の頸に廻された。アセナイスである。アセナイスは夫の側に腰を卸した。

「ねえ貴郎、もう到底も駄目ですよ……小兒は！。聲が段々衰へて参りました。どうかしてくれと言ふかと思ふと笑ひ出すんですもの。それを聞くと、私、胸が割けるやうですわ。今眠つた所ですけど。あゝ月が出ましたね。どうかしないともう夜明までは難しいでしやう！。どうかしてやつて下さいな。どんな事でも致しますわ。ねえ貴郎、どうにかして生命の助かるやうに御願ひ申す所はありませんでしやうか。ねえ貴郎」と妻は低い聲で言ふ。

然り、ヘルマスも其の「御願ひ申す所」を探してゐるのである。全頼り所



は唯だ其より外にはない。祈りたい。悲しさも打明けたい。自分以上の力を求めて、其れに身を投げ掛けて慈悲と恩寵とを願ひたい。此のまゝ見殺しにしては父母としての責任を完うしたものは言へない。力も盡さず、叫びもせず、祈りもしないで、小兒の苦みながら死んで行くのを見てゐられやうか。

ヘルマスはアセナイスの側に跪いた。

『あゝ奈落……奈落の底から祈ります。私共の眼は霞んで居ります。小兒は死にます。あゝ小兒が、小兒が死んでます。どうか小兒の生命を取り留めて下さい。御願ひで御座います。恩寵深き……』

とヘルマスは叫んだ。

答はない。寂として何の音もない。縫らうとして手を伸べた。觸るゝものは唯だ大理石の卓子である。其の指の冷たい固い彫刻した石に觸つたとき、

軸物が撥ね飛んでばたりと床に落ちた。次の室を忍びやかに歩く僕の靴の音が微に聞えるばかりである。ヘルマスの心は氷の塊のやうに冷やかである。やがてアセナイスを助けながら静かに立ち上つた。

『駄目だ。もうどうとも仕様はない。小兒のときに何だか聞いたやうだが、もう全く忘れて了つた。どうかして其れを思ひ出したい。邸も要らない。何も要らない。あゝあの事を思ひ出したい。小兒さへ助けて貰へば……』

とヘルマスは絶望の歎息を漏した。

奴隷が恐るゝ室に入つて来て、主人の顔色を窺ひながら、

『旦那様、唯今、豫て謝絶しろと御申付けになりましたアンテオケのヨハネ長老がお見えになりました。どう御断り申上げてでも御聞入れになりません。まだ廣間でお待ちになつて居ります。お客様のマルシオン御老人が頻りに追ひ拂はうとして御在でになります』



と取次いだ。

ヘルマスはアセナイヌの手を取つて、

「お來で、先生に御目に掛からう」

と急いで廣間へ出た。

廣間の中央に輕蔑の眼に見据ゑて冷笑しつゝ罵倒するマルシオンの前へ、ヨハネ長老は黙つて靜かに忍んでゐるのを奴隸は不思議さうに眺めてゐるのであつた。憔悴したヘルマスの顔を眼敏く見つけたヨハネは、

「私は是非ともお前さんに會ひたいと思つて訪ねて來た。お前さんは呼びには寄越さないけれど、非常に煩悶してお在でと聞いたので是非會ひたいと思つて參つた」

と何時に變らす優しい。

「左様で御座います。私共はもう絶望の淵に投げ込まれました。先生、私の

小兒は死します。此の邸も、此の榮耀も、先生、小兒の生命には何の助けにもなりません。昔は此様な時の心得もありました。先生の御膝の下にゐたとき教へて頂いたあの語、希望を起すあの語、其の一語は此の老人から取り上げられました。此の老人が封じて了ひました」

とヘルマスはマルシオンを指して言ふ。

「ふん、あの語、あの名前かな、大事な名かな。あれが何んぢやい。一等の賢人、いや神聖な長老さん。あの語は何んぢや。お前さんが勝手に夢を見て拵へ上げた勿體ない名ぢや。何人が其様なものを有難いと思はうかい。此の青年は又勝手に自身で忘れたんぢや。狡しい奴でな。乃公は約束によつて富も快樂も名譽をも授けて遣つた。其の御代りが何だと思はつじや。其の夢の語ぢや。此の男が持ち厭んだあの語ぢや」

とマルシオンは口を歪めながら冷嘲する。



「黙れ、悪魔の手先、何人と雖も漫りに口にする事を許されぬのは其の語だ。墮落しない限りは何人も失つてはならないのは其の語だ。悪魔のみは其の語を聞いて戦慄する。今私が其の語を此處で言はないうちに此處を出て行け」

と長老の鋭い語は室内に鳴り響いた。

マルシオンが柱の蔭に遁げ込んだ拍子に其の傍にあつたランプが臺から床へ轉げ落ちた。其の混雑にまぎれて彼は影のやうに姿を隠して了つた。

ヨハネはヘルマスに振り向いた。其の語の調子は柔かである。

「お前さんは自ら思ふよりも深い罪を犯した。お前さんが易々と棄てて了つた語こそ、あらゆる生活の要となるのである。其の語がなければ人の世は何の意義もない。生きて平和なく、死んで隠場がない。其の語があればこそ愛情も醇化される。悲しむものも慰められる。希望も永遠に盡きない。此

れこそ人の聞いたことも、思つたことも、考へたこともないほど貴い語である。其の語は我々に生命を始め萬物を下された方の御名だ。我々の方で其の名を忘れても、彼方では御忘れなさらぬ。お前さんが小兒を憐れむにも、勝して我々を慈しむ給ふのである。我々は其の御膝の下から迷ひ出ても、彼方からは野越え山越え尋ね廻つて下さる。其の獨り子をさへ遣はされた。其の獨り子が今夜私をお前さんの所へ御遣はしになつた。お前さんが忘れたと言ふ名を、もう一回教へて、亡びより救はうとなさるのである。靈魂の奥から好く耳を傾けて聞かねばならぬ。其の祝すべき聖名は、我等の父なる神といふ……」

と長老は諭した。

ヘルマスの胸に結んだ冷やかな煩悶は、氷の斷片が暖流に會つたやうに融けた。温かなみ赦しの恩寵は、頭の頂から足の爪先まで浸み渡つた。失つた



ものは發見された。平安の露は枯稿した靈魂に降られた。凋みかかつた愛の花は再び頭を擡げた。ヘルマヌは立ち上つた。天に向つて兩手を掲げた。

「あゝ主よ、我れ深き淵より爾に訴へ奉る。あゝ我が神よ、恵み給へ、我れ爾を信じ奉る。我が神よ、爾が與へ給ひし賜を願はくば我より取り給ふ勿れ。あゝ我が神よ、我が兒の生命を救はせ給へ。あゝ爾神よ、我が父よ、我が父よ」

と叫んだ。

「聽さる！」

と言ふ聲がアセナイスの耳に響いたやうに思はれた。室の反響であらうか。けれども同じ聲は再び繰返された。夢から覺めた小兒ははつきりした低い聲で、

「父よ！」

と呟いた。

### 降誕節飾樹の由來

(一)

時は紀元七百二十二年、降誕節前日の事であつた。

モウゼル河沿岸一帯の白雪皚々たる廣い牧場や、西に傾く太陽の光に東の坂へ長い蔭を投げて、其の横へは珍らしく勿忘草の咲いた峻しい山や、天井の所へ龍膽の密然生えた明い水門や、高い花園の中央へ、東は鐵御納戸に西は紫に見えるフアルゼルの修道院の壁など、總ての光景が物靜かで、乾坤寂寥、息を殺して谷より流れ下る河の微かな囁きに耳を傾けてゐるかと思はれる。

修道院も夕暮に靜寂としてゐる。此の日は朝から院内の修道婦たれも珍らしく喜ばしうに騒いでゐた。好奇心と感激の情とは此の靜かな院内の隅々



まで漲つたのであつた。有名な人物が此の修道院を訪問したのである。有名な人物と云ふのは羅馬の語に譯してポニフェスと呼ばれ、世間の人は「日耳曼の使徒」と稱する英國のウキンフリードである。偉い説教家で、博識多聞の學者で、更に大膽不敵な旅行家、冒險的漫遊家、小説的司祭である。

ウキンフリードは麗はしいウエスセクススの故郷を飄然と立ち出でた。ナツテッセルの有福な修道院の院長に選ばれたけれども辭退した。カアル王宮附の監督司祭の位も顧みなかつた。唯だ山野を跋渉して異教徒に道を説く外には何もかも眼中にないのである。ヘッセ、チウリンギアの森の中、サキツニイ州の隅までも僅かな供を隨れて、山を越え沼を渡つて木の根を枕に夢を結びつ、今日は東に、明日は西と、幾年月の間、漂浪ひながら、安逸を惡み樂を棄て、唯だ辛苦を慕ひ、危険を友としてゐるのである。

此はそも如何なる人物であらう。快活で磊落な、槍のやうにすらりとして櫂の杖のやうに堅固な風采である。其の顔は若々しく、滑かな皮膚は風と日とに晒されて青銅のやうな色をしてゐる。澄み渡つて深切の情を湛へた灰色の眼は、經て來た冒險を語る時や、論争した似非司祭の虚偽な行爲を憤慨する時焔のやうに輝いた。

其の話す所は、神聖な寶物によつて行はるゝ奇蹟ではなかつた。各國の朝廷や議會や或は又莊麗な伽藍の談でもない。勿論此等を澤山見物してゐるのであるが、今日の話は海陸を跋渉した旅行の物語である。火事と洪水に惱まされ、熊狼や大吹雪、森林中の深夜の景、異教の神々の殘酷な祭壇、怪しい血腥き其の犠牲、偕ては漂泊する蠻人に追はれて危機一髪に迫つた有様などである。

聴衆は靜かに囁き合つてゐる。話に伴れて何れの顔も蒼くなり、又其の眼



は敬慕の念に輝いて来る。互に腕を掛け合つて寄り添ひながら、半は面白く、半は恐怖に驅られてゐる。年長の修道婦たちは其の仕事を棄て、巡回教師の話を聞くやうに説いて歩いてゐる。彼等は皆此の人の物語が、一々事實であるのを能く知つてゐる。彼等のうちには没落した自分の家から揚がる煙を眺めた記憶を有する者も少くない。又或は其の兄弟が尙ほ生き残つてゐるならば漂流してゐるであらうと、夜となく日となく其の蠻地の空に思ひを運んでゐる者も少なくなかつた。

其の感慨無量の一日は疾く過ぎて、今夕餐の時が来た。院内の婦人は皆悉く食堂に集つてゐるのである。

上段に院長アツダラ夫人が着席した。アツダラ夫人はダロポルト王家の息女である。銀のやうな髪へ雪と清い羅を被つて、襟と袖との眞白なエルミンの端然とした衣服に、紫のチウニツクを羽織つた姿は、何方から見ても内親

王殿下である。其の右には今日の正賓が着席して、左には今學校から歸つて来たばかりの丸々と肥つた男らしいグレザル、即ち内親王の孫に當る若宮が席に着いた。

種と梁とを暗褐色に塗つた長い薄暗い廣間には、純白な布を被つた綺麗な修道婦たちが二列に並んでゐる。傾いた太陽は窓の頂から射し込んで壁の上の方へ茜色の模様を染め出してゐる。室内は繪に描いたやうに美しく、又静かである。此の修道院の規則として食事の後では席に着いたまゝ暫くの間一同黙想する。それから一人が聖書を高く朗讀して、一同之に耳を傾けるのである。

「今日は孫の番で御座います。學校でどの位勉強が出来ましたか試して見ませう」

と院長はウキシフツイドに言つて、



「グレゴルさん、聖書の印をしてある所を読んで御覧なさい」  
と若宮を顧みた。

少年は席から立ち上つた。さうして寫本の音を繰り廣げた。寫本はジエロオムの拉典譯で、印の所は「使徒パウロ、エペソ人に贈れるの書」の、戰場に臨む勇士のやうな用意を基督者に勧めた節句であつた。若々しい聲は玉を轉ばすやうに朗らかに、少しの誤りも淀みもなく一章の終まで読み上げた。

ウキンフリイドは微笑を湛へて聞いてゐたが、  
「ふん、男らしく讀めましたな。何が書いてあつたか解りますか」と言ふ。

「解りますとも、神文。ツレヅエスの校長から教はつたのです。此の書は始めから終まで讀みましたから諳誦でも出来ます」  
と若宮は答へた。

それから少年は頁を繰つて、更に諳誦し始めたが、ウキンフリイドは手を舉げて親しげに制しながら、

「いえや宜しい。其れには及びせんちや。祈禱は人間から神様に御話し申上げるので、聖書は神様から人間に御話し下さる聖聲ぢやな。今神様は何と仰せられましたかな。其の勇士と武具と戦争の話を、貴下の語でモ一度言つて御覽うじろ。皆に解るやうにな」

少年は躊躇した。赤面して口籠つてゐたが、臆て寫本を持つてウキンフリイドの傍へ卓子を廻つて來た。

「神父様、どうぞ讀んで下さい。私は此の文句の調子は好きですけど、意味は能く解りません。宗教と、それから信仰の議論と、修道院の司祭と修道婦の事なら、お祖母様から聞いて知つてます。餘り好きぢやないけど。それから戦争の事も、勇士や英雄の事も、ヴァシルだの昔譚を讀んだり、又ッ



レヴェエスの兵隊を見て少しは知つてます。其の事をもつと聞きたいのです。私は大好ですから。如何して此の二つが一緒になれるでせうね。教會の中務めに何故武器が要るんでせう。私には解らない。其の意味を教へて下さい。此れを知つてゐる方は神父さんより外にはないでせう』  
ウキンフroidは書物を受取つて伏せた。さうして自分の手で子供の掌の甲を叩きながら、

『それらや皆を晩禱に立たせた後にしませう。皆が勞れますからな』と言つた。

院長の合圖と、口誦む祝禱に送られて一同は快い聲に囁きながら、床の土敷をさらりと軽く踏んで、潮のやうに淑かに戸口から廊下へ退いて行つた。而して暮れ行く室内に三人の顔のみが残つてゐる。

ウキンフroidは總て人生の生活と、兵士の比喩とを對照して話し始め

た。

自ら實驗に基く新たな光明が其の比喩の節々に現はれた。利己心との争闘、胸中に湧き起る悪心との戦闘、いつの時代にも人々を荒野に誘惑する悪魔の物語、其の狡計に陥れられて、悲むべき森林に迷ひ込む人々、悪魔の拜する神々、古い森林に纏れ合ふ枝を組んだ其の住居、雑草繁る洞穴や、其の騎つてゐる暴れ馬、敵を脅すに用ふる光つた槍、又其の神々と云ふのは空中にある虚偽の靈で、暗の支配者であること。更に斯かる悪魔と戦ひつゝ、信仰の盾を振翳し、憤れる彼等に迫り、眞理の劍を以て之を征服するは、此上なく光榮で又名譽であること。之に對して猛進し、之と戦ひ、之を服する以上に大膽の事業の他にないことを教へた。

「御覽うじみ、今夜此の院内は寔に静かぢや。冬の眞中に、花の咲いた園に出逢つたやうなもの。風の狂ふ中へ大きな木の枝で圍まれた鳥の巢、颯風



の荒れ廻る海の一方にある穩かな港のやうなもの。此れこそ静寂、祈禱、冥想のため、特別に神様から召された人々に對する宗教の意味で御座るぢや。

けれども此の廣い森を出て、世の中の人の心を探つて見るとな、森にはそよとも風の吹かない時でも大旋風が起つてゐるのに氣が着かんで居る。憤つたり、むごたらしい心の者には今晚「平和の君」が御誕生遊ばされても何の關係もないぢや。御聞きなされ、神様に招かれて選ばれた者は、基督のため、此の世に對して進軍し、戦争して勝利を得ねばなりません。其れはな如何様な苦しさにも辛さにも堪へて行かにならぬと云ふ譯ぢや。基督を御導き申す門を開くため方角關はず戦はにやならぬ。救ひの胃があれは大丈夫、正義の胸當を外にして此の鋭い槍を防ぐ胸當は外になり。平和の福音さへ備はつて居れば此の旅行には此れに勝した靴は御座りませんぢや。

靴？、左様

と一段聲を張り上げて、不圖何か思ひ出したやうに笑つた。突き出した足には重い牛皮の長靴を穿いてゐる。靴は膝まで一杯に脛を包んでゐた。

「御覽うじろ。十字架の戦士は斯う云ふ靴を穿くぢや。乃公はトオアスの監督の靴を見たが、絹糸で縫をした山羊の白い皮でな。或る日の事犬がばら／＼に引破つて了つたぢや。それから修道士が穿く革草履を見たことがある。さう乃公も穿いて見ましたがな、ちよつと旅をするに、六足あつても一日に足らないで、今ぢや此の硬い鐵のやうな皮の靴を穿きますぢや。此れならば岩で御座れ、木の株で御座れ平氣なもの、それでももう踏み破つたのが一足や二足ぢや濟まない。此の旅の終るまでにはまだ幾足穿くか解りませんぢや。神が恵んで下されば乃公は此の靴を穿いたまゝ死にたい。



絹布の柔かな寢床の上より遙かに心地が好からう。勇士、獵師、樵夫の靴……此れこそ平和の福音の備へで御座るぢや。司祭は其の褐色の手を少年の肩の上に置きながら、「行きますがな。此の樵夫の靴を穿いて出掛けませうがな。此れが御互の召された生涯ぢや。基督にあつては大膽にならにやならぬ。鬼の獵師、荒野の征服者、信仰の樵夫になる。行きますせうがな」と説く。

少年の眼は輝いた。其の祖母を振り返つて見た。老夫人は其の頭を激しく振つた。

「其れはいけません。神父様、どうぞそんな荒い御話は此の兒に遊ばさないやうに願はじう存じます。私は此の兒が傍に居て呉れませんぢや不自由で御座います……それに老の樂みは唯だ此の兒ばかりで御座いますので……」

「は、う、教主よりも先づ以て貴女の御用がある？、異な事。弓に削るべき木を、絲巻に作らうと仰つしやるがな」とウキンフワイドは詰め寄つた。

「で御座いませうが、此の兒の身上には切心配を致して居りますやうな譯で……貴方の御職分は此の兒には無理かと存じます。森の中で餓死致すで御座いませう」

「さあ、或る日の事、乃公はオオル河の岸で野宿をいたしましたぢや。朝飯の席は出来ても食ふ物が無いと供の者が言ふ。貯へた糧は皆無くなりましてな。供の者はでつきり野の中で餓死すると言つて、いやはや甚い不平を申しますぢや。御聞きなされ、其の時鶉が不意と河から舞ひ立つたと思召せ。一同の中央へ大きな魚を落して行きましたわい。それで腹も出来れば無事に……」



野も越せましたて。「我は未だ義しき者の棄てられ、其の子孫の食を乞ふを見ず」ぢや』

と微笑みながらウキンフリードは言ふ。

『森の中の亂暴な野蠻人が毒箭で此の兒を殺して手斧で頭を砕くで御座います。せう。まだほんの小兒で御座います。とても危険を冒したり戦つたりする事の出来る年では御座いません』

『ふゝん、年は小兒でも心は成人になれます。萬一英雄が幼くして斃れば、一層光榮ある冠冕が頂けますわい。花も落ちねば葉も凋みませんぢや』とウキンフリードは捲くし掛ける。

老の進んだ内親王は効かに身震した。さうしてグレゴルを傍近く引き寄せ、其の褐色の髪へ靜かに手を置きながら、

『第一此の兒が其様な望を有つて居りますまい。とても私の傍を離れ難ねる』

で御座いませう。其の上今此處の厩には一匹も馬が居りませぬ。王家の孫が徒歩で參る譯にも行きますまい』

と言つた。

『お祖母様、ねえお祖母様、若しか貴女に馬が頂かれなければ私、直ぐ此の神の人』に尾いて徒歩で行きます』

とグレゴルは祖母の眼を見詰めながら言つた。

## (二)

ファゼル修道院の降誕節前夜の出來事から二年後の事であつた。獨逸中部の山脈を蔽ふ森林の中を、北へ向つて徐ろに旅行する傳道隊があつた。人數は僅か二十人に満たない。

團體の眞先にウキンフリードが立つてゐる。其の獵師然たる長靴には雪が



塗れて、脛の邊からはつら、が寶石のやうに散れて落ちた。其の胸に掛けた監督の徽章の十字架と、頸に確かと外套を留めた銀の釦の外は身の周りに何の装飾もない。其の手には長い丈夫な杖を握つてゐる。杖の頭には十字架が掛つてあつた。

其の傍に密着して親しげに足並を揃へてゐるのはグレゴル親王である。荒野を横断して長旅をした故か、脚は伸び、肩は廣がつて、精神のやうに體まで立派な成人となつた。短い上衣と帽子とは狼の皮で、肩には刃先の輝く斧を擔いでゐる。今は既に岩壁な樵夫となつて、一度斧を揮つて松の幹に向へば、火花のやうに木葉を散して易々切り倒し得るやうになつた。

嚮導の直ぐ後に馭者が二人、二匹の大きな荒馬に食物と野營の道具を山のやうに積んだ不細工な轡を引かせて尾いてゐる。馬は凍つた鼻面からむくむくとも雲を吹き出してゐる。胸からはぼつ、湯氣が立つた。爪毛は足毎

に雪に沈んでゐる。一番後には投槍と弓箭を以て武装した兵士が馭りをしてゐる。此の時代に徒歩で歐洲を旅行しやうと云ふには、此様いふものが決して小兒騙しではなかつた。

何處まで行つても際限のない、薄暗い森林は、丘を登り、谷を越え、平野を流り、連峯を包んでゐる。其の間へ、悪魔の乗り移つたやうな狼の群の徘徊する沼地や、大山猫や猪の隠れた叢がある。人の顔を怖るゝことを知らぬ、悍猛な熊は岩間に整伏してゐる。森の陰鬱な蔭には猛獸よりも残忍で危険な人間、義理もなく人情もない、無敵砲な強盗、人面狼心の動物共、處定め

の道刺の群、が潜んでゐるのであつた。グイバア河口からライオン河口まで旅行しやうと思ふ者は、運命を神に委ねて、箭を船から外して通らねばならなかつた。



旅人は渺茫として際涯のない怒濤のやうに蜿つた森林の大海原で前後左右  
を取り巻かれ、何方を向いても蔽ひ被せられてゐるやうに見えるのであつた。  
節瘤だらけの榎の樹は狂ふ如く枝を突き出して満潮の波のやうに並樹の間に  
起臥してゐる。山毛榉の樹の圓い灰色の滑かな森は小高い山の坂を蔽うてゐ  
る。けれども一番多いのは眞直な松と樅の樹とで、幾千萬とも數知れないほ  
ど一面に蔓延つて其の枝は宛然暗緑色の渺茫たる洪水のやうに谷と云はず、  
山と云はず、密然と繁つてゐる。そして諸所に波の泡のやうに形の崩れた鶏  
冠に似た頂が高く聳えてゐるのであつた。

其の陰暗い海の間を縫つて白く輝いた狭い川……雪に蔽はれた羅馬の古い  
道が走つてゐる。丁度昔大きな船が此の緑の海を掻き分けて薄い滑かな泡を  
残して行つたやうである。此の道を辿つて旅人は進むのである。霞は深く辛  
酸は一通りでない。殊に冬枯に食をあさる狼の群を避ける苦心はまたなかな

かであつた。傳道隊の足音は静かである。けれども樅は凍つた雪にきしんで、馬の蹄は  
寂寞を破りつゝ震へた。道の西の端の方へ蒼白い影が段々長くなつて来る。  
浅い圓天井の上から覗いてゐた太陽は向ふの高い樹の頂に隠れて暗い影が、  
餌を見つけた猛鳥のやうに蔽ひ被さつた。

「神父様、一日の行程には充分達したでせう。もう憩んで食事をして寝ませ  
う。此れ以上行くと、もう足跡が見えませんが。足跡の見えない所を行くと  
ダビデの語に背きます」

とグレゴルは嚮導者に言つた。  
「いや、グレゴル、今でも人の足型の通り踏んでは居るまい。ダビデは「我  
れ人の足跡を喜ばず」と言つてゐるぢや。乃公は足跡を踏み外しても何と  
も思はぬ。唯だ少しも遠く行けさへすりや可いぢや。今晚是非行かねばな



らない所まで行けば可い。さあ帯を締め直して、此の道に倒れた木を切り  
拂はつしやい。此處へ止つちや大變ぢや」  
とウキンフリードは笑ひながら言ふ。

少年は柔順しく命令に服した。二人の樵夫は列後から飛び出して少年を助  
けた。斧の刃が柔かな樵の幹に當つたと思ふ間もなく、其の傾く枝は雪を掬  
つて撥ねた。ウキンフリードは其の従者を顧みて愉快さうに、葡萄酒を飲ん  
だやうに氣が生々したと笑つた。

「皆確りするぢやぞ。もう少し行かう。追着け月も出る。道は平坦ぢや。旅  
をすりや勞れるに定つてゐるわい。今日は故郷の英國で降誕節前夜の宴會  
をしてゐるのを思へば乃公も旅はつらい。ぢやが此處では宴會をやる前に  
まだ用があるぢや。今王度森の異教徒共がゾオルと云ふ偶像を拜むため、  
ガイスマアの雷の榭の下に集つてゐるに相違ない。其れは見るも悲惨の極

ぢや。我々は彼等の暗を照す光として遣られた。此の森の異教徒共が、未  
だ會て聞いたこともない降誕節の物語を、此の同胞に教へにやならぬ。さ  
あ立たう。勞れた足を踏み締めさつしやい」

従者は一同喜んで之を諾した。馬さへ氣力を恢復したやう、其の困難の道  
に樵を曳摺らうと云ふ意氣込みで、武者震をした。而して足を踏み出すとき  
鼻から霜を吹き拂つた。

夜は漸次に迫つて來た。光は天の一方を破つて閃めいた。月影は一步一步  
に輝き渡つて來る。而して東の方森の屏風の上から顔を出した。狼の群は遠  
くで微かに吠えてゐる。けれども暫くで其れも消えて了つた。天地寂寥とし  
て何の音もない。緊縮した空氣の遙か先方に星はちらちら、綺麗めいてゐる。  
小さな全圓な月は銀の如く澄み渡つて、そよよと微かな風が樵の頂に彷徨  
つてゐる。光を便りに傳道隊は暗の迷宮を大膽に辿つて行く。



間もなく道は幾分廣潤な所へ出た。赤楊樹で縁を取つた廣い牧場があつて、其の後に騒々しい河が氷の缺片を打ち當てながら流れてゐる。傳道隊は人聲も光もない大きな村を通つて行つた。村の端れに、庭の手廣い離れ家の澤山ある邸宅がある。其處から獵犬が狂ふやうに吠え立て、厩を蹴る馬の足音が聞えてゐる。其の他には何の生きた音もない。唯だ冷かに照る月影のみである。人の子一人通らない。唯だ一度牧場の遙か向ふの端の道に三人の人影が忙がしきうに走つて行くのを見たばかりである。

道は再び深い森の中に入つてゐる。其れを曲つて左に登ると小さな山徑へ出た。山徑を暫く進ると、北のみ措いて三方悉く、全く平坦な中央に小山があつて、榎の木立つてゐる所へ來た。榎の木は周囲のヒイソの叢の上に聳つて、歪んだ武器を握つた巨人が灌木の軍勢を靡いでゐるやうに見える。

『此れだ』

とツキンフライドは叫んだ。眼は輝いてゐる。手に持つ十字架の杖を差上げ

『此れが雷神の榎の木だ。基督の十字架で虚偽の神ゾオルの鐵槌を粉碎する  
「ちや』

と言つた。

(三)

凋んだ葉は尙ほ榎の幹に密着してゐる。過ぎた夏の名残りの色褪せた旗もある。秋には眞赤であつた旗は全く色が消えてゐる。風と雪とに晒されたものであらう。然し今夜は此様な旗布まで昔の色を返して、紺碧の空に對照してゐる。夥しく其の樹の前で焚く火の光を受けてゐる爲めである。紅蓮の焰



の舌、朱玉の噴水は枝の間に廣がつて、頂にも周囲にも眩しいイルミネーションを點じてゐる。四方の森を照す蒼白く清い月影も、此處だけには光を隠し色を失つてゐる。其の光線の一筋も樹の枝には漏れてゐない。唯だ空に漂ふ靜かな光と、音を立てつゝ地に閃めく焰とを渡す雲の柱のやうである。火元はウキンフライドの一隊の方からは見えなかつた。人は長い列を作つて半圓を描きつゝ、其の周圍に立つてゐる。彼等は廣場の方へ背を向けて、顔は樹の木の方に對してゐる。此方からは光を背影にした大きな臃な黒い形もない不思議な半面黒像のやうである。

傳道隊は此方の森の端に暫く佇んで評議をしてゐる。

「此れは此の國の會議なのです。今夜は大切な會議を開く晩なのです。三日前此の部落の傍を通つた時其の議を聞きましました。昔がらの神に誓を立てる者が皆集つてゐるのです。此處では軍馬を神に供へて其の生血を飲んで其

の肉を食ふも強くなると云ふのです。傍に寄れば生命が無くなりませす。助からうと思へば此の十字架を隠さねば駄目です」と樵夫の一人が言ふ。

「乃公は隠す十字架を有たんわい」

とウキンフライドは尙ほ十字架を差し揚げてゐる。

「乃公は此れを見せて、其の力を此の愚民共に知らせる爲めに來たのぢや。今夜此處では軍馬を殺すよりも一層甚だしい罪惡が行はれる。偶像に獻げた生肉を食ふ位はまだしもぢや。乃公は其の夢を見た。十字架は此處に押し立てねばならぬ。我儕の救ひも此の外はない」

ウキンフライドの命令で、橋を森の下に残して二人の従者に守らせ、同は野の向方へ進んだ。蠻民は皆木の根の火に心を取られて居る間に、難なく其の傍まで近づいた。



「やあ此れは幸福、森の主！、寒夜の旅人に焚火は何よりの御馳走ちや」とウキンフリードの聲は鐘破のやうである。

千百の眼は聲の主の方へ颯と言ひ合せたやうに注がれた。無言のまゝ圓陣の中央は開かれた。ウキンフリードは従者を随れたまゝ悠々と其の中心に進むと、半圓の口は舊の通りに閉じた。

一同は圓陣を一渡り見渡した。集會者は黒装束ではなかつた。皆眞白である。きら／＼と眩しいばかり輝かである。婦は白い衣服を着て列の一端に集合まつてゐる。戰士は白い戎衣を纏つて此れも一團となつてゐる。列の中心を占めた老人の毛の外套も眞白である。焚火に一番近い處へ小兒の群は銀の飾と小羊の毛の純白な衣服を着て立つてゐる。今群衆は威嚴と恐怖の情を以て此の小兒の一團を眺めてゐる。焰は此の全景を包んで綺羅めきつゝ、跳ねては雪の上に消え行く血のやうな火の子を飛ばしてゐるのである。

光を正面に受けてゐない人物が一人あつた。其れは老神官インラッドで、火を後にして立つてゐる。長い衣服を寛く羽織つて、髪と鬚とは波のやうに縮れてゐる。其の顔は死人の如くに蒼白い。聽て徐々と前へ出て來た。

「貴殿は何者ぢや。何の用があつて參られた？」

「拙者は獨逸人の同胞で御座る。海の彼方の英國からわ／＼祝賀のために參つて御座る。尙ほ拙者の事へ奉る萬民の父よりの使者をも兼ねて」とウキンフリードが言ふ。

「それは好くこそ御出召された。ちやが御静まり召され。もう時が御座らんぢや。今月が空の中央に登らぬうちに訂らにやならぬ事が御座つてな。それとも貴殿が神の使の證據を持つて御出なされたら又格別いや貴殿には不思議な術が行へますかな」とインラッドは詰つた。



老神官の儼然な心に、不意と希望が閃めいたやうに此の鋭い質問を提出した。ウキンズグイドは失望の色が顔に現はれて、聲も自づと低い。

「いや拙者は不思議な術は行ひませんぢや。聞いたことは澤山あれど自分では出来申さぬ。萬民の父は普通の人に出来る力の外は拙者に下し置かれぬでな」

「では口を噤んで御控へ召され。貴殿は尋常の人間ぢや」

と叱るやうにハンラッドは言つて、

「引込んでゐさつしやい。今夜神々は我等を此處へ招かれた。今夜は神々にも人間にも慕はれ給ふ太陽の神、美のバルダアの御亡れ召さるゝ日ぢや。暗の時、冬の方、犠牲と恐怖の季節である。今宵此の樹の神、雷と戦の神はバルダア神の御逝去を憐れむ。其れのみならず拜を怠るによつて人間の上にも御咎めを下さるる。此の祭壇に供物を獻げでよりもうさつ

う時が経つた。此の靈木が血を飲まれたはもう久しい昔ぢや。然ればこそ其の時至らずして、其の葉は早や凋み、枝には更に精が盡きた。然ればこそ此の民はスラブに敗られ、ウエンドに負け、秋の收穫は思はしからず、牧場の羊は狼の群に侵され、弓の力は衰へ、投槍の柄は折れ、獵師は猪に殺され、疫病は村々に流行し、死者の数は生者に勝る恐ろしい態とはなつた。こりや者共、此の語に偽ありと思ふか」

稱讚の囁れ聲が圓陣の中から聞えた。瀑布の滔々たる響と、其の上に翳す松の樹に鋭く嘯く風のやうな音とに似た男女入り亂れた歌の聲は、野鄙な調子で起つては沈む。

ゾオルの神、雷の神

力あり、情あり

罰より我等を救ひ給へ



槌を振り上げ給ふ勿れ

我等に對する怒を鎮め

疫病を下し給ふ勿れ

我等の寶を取りて

其の償ひとなし給へ。

銀は我等汝に獻ぐ

寶石珠玉

いとよき衣

我等の所有物皆悉く

如何に貴きも汝に奉る

羊を我等汝に供へ

軍馬を我等汝に獻ぐ

輝く血潮汝を洗ふ

あゝ雷の神、靈なる神木

生命の水は汝が爲め流る

奇しき力ある靈なる神木よ、

力と慈悲を有ち給ふ

我等を罪し給ふ勿れ

我等を救し我等を救へ

我等を救し給へ

ゾオルよ！　ゾオル！

最後の一句を高く叫んで歌は止んだ。火の撥る音が著しく聞えるほどに歌の後は静かになつた。老神官は暫時口を嚙んでゐたが、毛蟲に似た眉は焔を遮る灰のやうに其の眼の上に被さつてゐる。やがて頭を擡げて口を切つた。



『そんなものを幾何獻げた所で神様を御宥め申す譯には行くまい。罪を潔めるにはもつと價値ある獻物が必要ぢや。もつと貴い赤いものを供へて此の靈木に生命を漕がにやならぬ。ゾオルはお前方の一層大事に掛ける一層貴いものを御望みとある』

ハンラッドは吹き上げる焔と、火の粉とを眺めてゐる小兒の一團の前へ進み寄つた。彼等は神官の言葉にも一向平気で、其の寄つて來るのも知らずに梢を渡つて行く火先を一生懸命に見詰めてゐる。列の一番前に其の火を一層無心に眺め入つてゐる孱弱い小兒がゐる。鶯色の眼は賢さうで、唇には微笑を含んでゐる。神官が突然其の肩に手を掛けたので小兒は振り返つて其の顔を見た。

『此れぢや』

と老人の聲は、流に繋ぎ留めた船の錨綱のやうに緊張してふるりと震へた。

『此れが神様の御撰びに預つた小兒ぢや。人民の愛を集めた會長の長男ぢや。聞きやれ、バアンハルド殿、お前さんは神々の側に英雄の列んでゐるヴァルハルラへ參るゾオル神の御使に立たるゝぢやぞ』

『はい、先生、お父様が可いと仰つしやつたら私は參ります。遠方ですか。走つて行くんですか。狼を防ぐ弓矢を持つて行つて宜しう御座いますか』と猶豫もななくはつきりと答へた。

髯武者の中には小兒の父、會長ガンドハルが立つてゐた。其の光景を眺めて太い溜息を吐いた。がた／＼震へる手は投槍の柄を確り握つて僅に身を支へてゐる。其の妻イルマは婦人の席から踰越き出て、片手に黄金の髪を引き揃へり、片手に頸の周りの銀の鎖を引き千切つた。頸は鎖に破られて紅い滴が其の胸へ流れる。群衆はさつと鬼氣に襲はれた。誰も口を利く者はない。



『さうぢや、若殿、弓箭も槍も持つて御出が可い。路は遠方ぢやが、お前さんは豪氣な獵者ぢや。行先の少しも解らぬ暗の中を行かねばなりませんぞ、恐ろしいかな』

とハンラッドは言ふ。

『いゝえ、黒暗でも熊でも追刺でも私はちつとも恐くはありません。私はガンドハルの子息です。人民の保護者です』

と小兒は言つた。

神官は火の前にある平たい大きな石の傍まで、羊の毛を着た小兒を拉れて来て、銀の飾をした弓と穂先の輝いた槍とを與へた。小兒の眼は白い布で隠されて、東に向つて石の傍に据ゑられた。群衆の大きな圓陣は、弦に引締られた弓のやうに、期せずして兩端はずつと前に進んだ。ウキンフリードも思はず神官の後まで詰め寄つた。

老人は地の上にあつた石の黒い槌を取り上げやうとして身を屈めた。此れがゾオルの靈驗著しい槌である。其の瘦腕に滿身の力を籠めて神官は頭の上まで其れを捧げた。槌は暫く小兒の頭の上で立ち迷ふと思ふ間もなく、くるり轉じて今や將に小兒の腦を粉碎するかと感せられた刹那、絹を裂くやうな悲鳴は婦人の側から聞えた。

『私！、私を！。バアンハルドを助けて！』

隼のやうな勢で婦人が小兒の方へ駆け寄る。其の時遅く、或る手は羽影の如く動いた。

ウキンフリードの重い杖が打落す槌の柄を確と押へたのである。槌は不意を食つて老人の手から外れ、祭壇の石に當つて其れを二つに割つた。恐怖と歡喜とは圓陣の端から端に渡つた。焰は高く吹き揚げた。驚きの鎮つた時、群衆は小兒がイルマ夫人の腕に庇はれてゐるのを見た。仰げば壇の上には天



使のやうに輝く面のウキンフリードが立つてゐた。

## (四)

箭を射るやうな山潮が途を作つて流れ落ちた。大石巨巖は崖から水流の真中に轉じて來た。千筋に分れた水勢は岩を噛んで滔々と沫を飛ばしつゝ狂つてゐる。右に避けやうか左に交さうか、たい惑ひつゝ驚くのみである。

其の様に譬ふべきはウキンフリードが此の大會議の思想と感情との真中に飛び出した大膽な行爲である。一同は尙ほ鎮り返つてゐる。憤怒、疑問、畏敬、歡喜、交混じた感情は群衆の胸に絡み合つてゐる。彼等は歸趨に苦んでゐるのである。氏神を侮辱した此の旅人を怨まうか、但しは若殿を救つた此の恩人を歡迎しやうか。

老人は無言のまゝ祭壇の傍に蹲つてゐる。群衆は俄かに色めき立つて議論

を始めた。

神々を宥める爲めに矢張り犠牲を獻げやうか。いや此の小兒は斷じて殺してはならぬ。酋長の一番好い馬を殺して身代りとしやうか。それでは充分であるまい。靈木は馬の血を好まれぬ。それよりも良策がある。それは神々が犠牲にと送られた此の旅人を供へて罪惡の賠償とすることである。

榎の木の洞んだ葉はさら／＼と鳴つて、頭の上で囁いた。焚火はばつと明るくなつて又沈んだ。群衆は激越な調子で互に争ひ合つてゐる。すると酋長がンドハルは、其の槍で地を打いて、判決を下した。

『異説紛々ちやが一つも同意は出來ぬ。輿論は求められんちや。先づ静まらう。此の旅の御方の御説を承はらう。其の御説に従つて小兒を生かすとも殺すとも定めたが可い』と説いた。



ウキンフリードは祭壇の上に突立ち上つた。懐から羊皮紙の巻物を抜き出して読み始めた。

『黄金の王位に座する羅馬の大監督、ヘスシアンヌ、チウリギアンヌ、フランクス、サキソンス等、森林中の住民に書を贈る。』

『In nomine Domini, sanctae et indivisuae Trinitatis, Amen』(譯、主たる聖なる三位一體の神の御名に由りて、ア、メン)』

恐怖の聲は群衆の中へ起つた。

『羅馬の神聖な語だぞ。此の語の解る者は世界の何處でも賢人に限る。其の中には不思議な術がある。聴け、聴け』

ウキンフリードは手紙を此の國の語に譯しながら讀んだ。

『余は余の兄弟ボニフェスを汝等に遣す。而して之を汝等の監督たらしむ。兄弟は必ず唯だ其の信仰をのみ汝等に教へ、汝等に洗禮を施し、誤れる方

向を轉じて救の道に歸せしむべし。之に仕ふるに萬事父の如くすべし。其の教ふる所に汝等の心を傾けよ。其の汝等に赴くは地上の物質を得んとするに非ず。汝等の靈魂を得んがためのみ。罪業を棄てよ。虚偽の神々を拜する勿れ。是れ悪魔なればなり。爾後血腥き供物を獻ぐる勿れ。又馬の生肉を食ふ勿れ。唯だ我が兄弟ボニフェスの命する所に従つて行ふべし。之が爲めに居室を建築せよ。而して汝等の間に住ましめ、尙ほ汝等が唯だ獨りの活ける神、天に在す全能なる主に祈禱を獻ぐべき會堂を建築せよ』

是れ光榮赫奕たる使命である。高遠、鞏固、平和、慈愛の使命である。

拉典語の威嚴は強く群衆の心を壓伏した。恰も音樂の調子に夢中になつた聽衆のやうである。

『では其の全能の神から託されて御在での御語を御聞かせ下されい。今晚の犠牲を如何取計ひませう』



とガンドハルは言ふ。

「此れが其の御語ぢや。此れが其の指揮で御座るぢや。今宵一滴の血も流すことを許されぬ。貴殿の奥方の温かな胸に抱かれた可愛い少年を救はれよ。暗のうちに生きものの命を取るは御法度ぢや。そればかりで御座ならぬ。天光を蔽ふ彼の木を先づ取り拂はれよ。今宵は萬民の父の獨子、人類の救主、基督御降誕の當夜とある。基督は美の神バルダアに勝り、智の神デキに勝り、美の神フレエヤに勝る。基督一度現はれ給ふ上は、血腥き犠牲は廢せられねばならぬ。方々の神と呼ぶるゝゾオルは死んだ。ニツフェルヘイムの影深くゾオルは長へに隠れた。其の権力は破れた。方々は力もない神に事へらるゝか、見られよ同胞、方々は此の木をゾオルの靈樹と仰せらるゝ。ゾオルは此處へ鎮座せられやうか。此の木を守護せられやうか」同意を表する聲々が列の隅々に起つた。群衆は紊亂し、婦人たちは顔を蔽

うた。ハンラッドは其の顔を擡げた。

「ゾオルの神、罰し給へ、ゾオルの神」と嗔れ聲に呪つてゐる。

ウキンフリードはグレゴルを手招きした。

「お前さんの斧を持つて御來で。それから乃公にも一つ。さあ若い樵夫殿、お前さんの御手練を拜見しやう。森の王樹を手早く倒さつしやい。早く仕ないと萬事失敗ぢや」

兩人は向ひ合つて榊の根に立つた。兩人は帽子も外套も脱ぎ棄てて足場を量りながら確と脚を踏み占めた。固く斧の柄を把つて輝く刃先を振り上げる。

「木の神、怒らつしやるかな。今兩人がお前さんを打ち切りますぞ」とウキンフリードは叫んだ。



「木の神、貴方は力があります。さあ喧嘩をしませうとグレゴルが相槌を打つた。

丁々と互に鳴り響く幹を切つた。光つた斧は調子を取つて閃めいた。鋭敏な鷲が獲物の上へ輪に舞つてゐるやうである。

木の屑は幹の切れ込んだ穴から火花のやうに飛び散つた。斯くてウキンフリイドの偉大な奇蹟の幕は開かれた。

冬の夜の寂寞を破つて怖ろしい響が山の上に開えた。

昔の神々が白馬に跨り、狂ひ廻る猛犬を將て、箭を閃かしつゝ敵を微塵に碎かんと、走せ向はれたのであらうか。

強い旋風が頭の上にとつた。樹の枝は揉みに揉まれて、根から折れた。懸て塔を覆すかの如く大木は四つに割けて倒れた。

ウキンフリイドは斧を棄て、暫く全能の力に對して黙禱した。

次いでウキンフリイドは群衆を顧みた。

「此れは材木ぢや。倒れて家を建築するばかりになつて居る。此處へ眞の神と、使徒ペテロの爲め、新しい會堂を建築するぢや」

とウキンフリイドは更に其の側へ眞直に立つ樅の緑の若木を眺めた。樅の木の梢尖は星を指して、倒れた榭の木の間に立つてゐる。

「此の木は生きて居る。これは血に汚れぬ。此れぞ方々の新たな信仰の徽章ぢや。見られよ。天を指してゐる。此れを基督小兒の樹と申さう。此れを取つて會長の客間に連ばれよ。再び此の耻かしい宗教の儀式を行ふ爲め森に來てはなりませぬぞ。宗教の儀式は家の中で、さいめきながら、歌ひながら、愛の式を以て守るべきものぢや。雷の樹は倒れた。以來全獨逸中、小兒が基督降誕の夜に此の樅の木の周圍で歡び樂まぬ家庭は一軒もないやうになる時節が必ず來る」



と言つた。

群衆は此の小さな樅の木を森の端にあつた橋の上へ移し載せた。馬は足掻を早めて走り出した。此の新しい荷物を載せて橋が軽くなつたかのやうである。

一同はガンドハルの家に着いた時、客間の戸は廣く颯と開かれた。而して中央に樅の木を据ゑて其の枝には飛び交ふ螢のやうに燈が點された。小兒は珍らしさうに其の周圍に集まつた。バルサスの馥郁たる薫は室内を罩めてゐる。

ウキンフリードは廣間の上段、ガンドハルの椅子の側へ立つて、ベツレヘムの物語を始めた。馬槽の嬰兒、丘上の牧羊者、天使の群、夜半に歌つた天使の歌などを説明した。群衆は耳を傾けて其の語に引込まれつゝ静まり返つてゐる。

「アンズの下少年は話が長くなるにつれて母の柔かな腕に抱かれ、其の膝に寄り掛りながら少思慮であると言ふ。

母の耳に口を當てて囁き初めた。是れ又其母おどろきと其の對答に「母様、神官が私をヴァルハラに使に遣ると言つたときに、貴女は何故あんな大きな聲をなすつたの』

と言ふ。

「黙つて御在で』は、其の顔が輝つた。其の顔の輝きと口を當てて言ひながら母は一層近き引寄せた。小兒は母の胸に顔を埋め、

「母様、おや、お洋服が赤くなつてゐる。何此れは、誰が貴女を此様な目に會はせたの』と口を當てた。其の顔の輝きと口を當てて言ひながら母は一層近き引寄せた。小兒は母の胸に顔を埋め、

と其の指で胸の血の痕を差して尋ねた。

母は頬に接吻して、



「静かにしてお在で、御話を聞くんですよ」と制した。

少年は其のまゝ口を噤んだ。其の臉は追々重くなつた。けれどもウキンフ  
リホドが、今現に眼の前に見るやうに、ユダヤの山の上を天使が舞ひつゝ、  
讚美を歌つたと話したのだけは少年の小耳に留つた。小兒は珍らしさうに夢  
心地で聞かされてゐたが、其の顔は輝いて、母の頬の邊りに口を寄せた。  
「あゝ、母様、黙つて……はら聞えませう。今天使が來てますよ。あの木の  
後で歌つてゐるでせう。」

と低い聲で囁いた。……  
或る人は其れが事實であつたと言ふ。或は又其れはグレゴルと其の従者た  
ちが降誕節の讚美を合唱したのだとも言つた。

至高處に神には榮光……

地には平安  
人には天よりの恩寵あれ  
永へに窮りなく。



グアン・ダイク短篇集 終

明治四十四年十月廿五日印刷  
明治四十四年十月廿九日發行

グアン・ダイク短篇集

定價金四拾錢

不許  
複製

著者 日高善一

發行者 山縣操

印刷者 荻原勝次郎

印刷所 博文館印刷所

發行所 東京北豊島郡巢鴨町  
大字上駒込二十番地  
内外出版協會

(電話番號下谷四百三十八番)  
(振替貯金口座東京三百五十五番)



楠田麥圃 譯

# チエーホフ 短篇集

定價金 參拾錢 郵稅 四錢

巽に本會の『トルストイ短篇集』を出し、次いで又『ツルゲネーフ短篇集』を出  
すや、何れも讀書界の歡迎を受けて再版し三版し、而も新購讀者の多きこと  
今尚ほ依然として當初の如し。ト翁ツ氏二家各露國文學の一面を代表すと雖  
も、茲に又アントン・パウロキロ・チエーホフ氏あり、主として題材を農夫、小  
商人、職人、牧者等に取り、露人及び其の生活状態を描くに別に新たに一家  
の境を拓きて、絶えて他の文豪に無き所の特色を具現せり。本會既に前二家  
の短篇集を出し、今 **此の文豪の五十年祭** 行はるゝの時を  
や更に露都に於て **エーホフ短篇集** を出すもの、ますます進んで邦人の間に露國文學の特殊な  
る味を傳へんと欲するに外ならず。

- 目次
- 百姓
  - 追放
  - 提琴
  - 提
  - 琴
  - 牧笛
  - 悲愁

東京 東野 金野 上野 三井 逓信 十二番 内務 五十五番 協會 出版

## 小説

# その前夜

再版

ツルゲネーフ作 相馬御風譯

定價金 七拾錢 郵稅 六錢

『近代傑作集』の一として、露の文豪イワン・ツルゲネーフの作『オン・ゼ  
イーブ』を譯したものである。主人公はエレンと云つて露國中流の家庭  
に於ける一處女、之に對して、快活なる才子肌の美術家、理性に富める  
哲學者肌の學生、祖國ブルガリアの滅亡を慨し、其復興を圖らんとする  
愛國の志士等、各特殊の性格を示せる人物を描出して、主人公エレンが  
性情の變化發展し行く様を叙し、遂にエレンが、父母を棄て故郷を捨て  
全身の愛を傾けて結婚したる志士インサロフが、故國の同志より急  
報に接して彌々革命の旗を翻さんとする時機に瀕み、歸國の途中激症  
の爲めに斃れたので、エレンは健氣にも亡夫の志を繼いで終にブルガ  
リアの軍に身を投ずると云ふに一篇の結末を告げて居る。而して、女  
性を描くことには特に妙を得たる作者の筆に成れるエレンは云ふまで  
もなく、其他の人物の描寫に於ても實に巧な處がある。ツルゲネーフ  
の呼び聲が盛んなる割合に、まだ一向長篇の作が紹介せられて居ない  
今日、斯る大作を譯了せられたのは、一般讀書界の爲め大に喜ぶべきこ  
とである。

ほとすぎ批評

東京 東野 金野 上野 三井 逓信 十二番 内務 五十五番 協會 出版



文學士 皆川正禧譯述

# ワグネル物語

定價金六拾錢 郵稅六錢

時事新報文藝週報批評

此書はラムの「セキスピヤ」の如く、ワグネルの歌劇の梗概を物語風に作りたるもの、讀者はこれに依りて、略ぼ原作構想の妙致を窺ふを得べく、未だ獨英の文に通ぜずして、これ等世界の大作の内容を知るには最も便利なり。本書所載總べて七篇、外に「ワグネルと其著作」と題せる一文を添ふ。「リエンジ」は羅馬に於ける最終の保民官リエンジを主人公とせる悲劇にして、流言に迷はされ、恒信の依る所なき多數民衆の爲めに誤られて、一團の猛火に包まれたる政廳の露臺の上に、毅然として最後の息まで、國の爲めに盡せる勇士の面目を見るべく、「幽霊船」は魔神の呪詛を受けたる、所謂幽霊船に關する、頗るミスチツクなる物語、「歌客タシホイゼル」と「歌曲の長」とは、歌曲に巧なる天才を主人公とし、魔術類なき佳人を女主人公とし、一は悲劇的に、一は光明的に結べるもの、「鷲の武士」は聖山サルツァントの聖杯守護の任に當れるローヘンクリンが、鷲の翼に乗りて王女の急を救ふといふ物語、「王妃の嘆き」は一篇の悲劇、「呪詛の指環」は九篇中の最良長篇にして、「ラインの黄金」「戦艦」恐れぬ勇士、「神族の破滅」の四篇に分れ、ニヘルンゲンの古語に想を構へたるもの、神秘多趣、讀む者をしてそぞろに古語程の人たらしむ。譯者の文章は華麗にして、聊かの滯滞を見ず、此種の翻譯には、持つてこの才筆なり。裝釘の贅を除き、量に比して價の頗る廉なる、最も讀者の心を待たり、近來稀に見る好翻譯といふべし。

元版 東京 東金貯替 鴨野 上三 駒三 込百 十二番 内版協會

## 佛國 小説

# 少女の操

再版

宮地竹峯譯補

定價金四拾錢 郵稅四錢

時事新報 文藝週報批評

有名なる佛國作家サント、セルの傑作「ポールとマリー」の譯にして、原著の價值は世上自ら定評あり。内容は印度殖民地モリチアスに旅し、幽寂なる谷間に憩ひ、白髮の一老翁より聞き得たる、小舎の歴史を叙したるものにて、話はこの地の曠野に來り棲み、マリーが、未だ搖籃に並びて寝れしヨマ、歩きの、幼き昔より芽を生ぜし愛情は、年と共に少女が、月日を過したるも、昔の貧しき戀人の清き愛を忘れず、富貴の結婚を辭して、再少年の月日を過したるも、昔の貧しき戀人の清き愛を忘れず、富貴の結婚を辭して、再印度の月に歸り、樂しき生活を送らんとし、ルイズ港に向け出發し、既に上陸地を目前にし、三度、遠かに襲ひ來りし大暴風雨の爲め船暗礁に乗り上げ、マリーは遂に溺死す、後屍を檢するに、彼女が昔マリーの記念として與へたる、ホーロの肖像を握りたるままに、死に居たり。かくして少女の操は富貴榮達を爲し、汚されたりしを知り、マリーは悲歎の餘り病を得、遂に不歸の客となり、續いて双方の母親と云ふ人人生の悲劇を、曾て平和愉快の氣満ちし小舎には、再び棲む人なく、荒廢に任せり。文中相思戀の切なる情を、老翁は涙ながら書きあらはし、あれど、天然として去れりと云ふに終はる。文中相思戀の切なる情を、老翁は涙ながらの筆の力ならん。

元版 東京 東金貯替 鴨野 上三 駒三 込百 十二番 内版協會



譯邦木々佐

# いたづら小僧日記

# 續いたづら小僧日記

# おてんば娘日記

(第二十一版)	定價金四拾錢
郵税	四錢
(第十版)	定價金拾錢
郵税	四錢
(第十二版)	定價金拾錢
郵税	四錢

▲「東京朝日新聞」曰く  
夏目漱石の「我輩ハ猫デアル」と同工にして異曲其  
て人の頭を解かしむる所は此れ却て彼に優る所の天  
下の奇書也

▲「東京日々」亦曰く  
奇想天外より落し我輩ハ猫  
ち來る所漱石の  
以上なり、譯文創作の風致  
巧妙凡て創作あり  
幸き世に笑ひたき人は一讀すべし。

▲「文藝俱樂部」曰く、いよ、出で、奇抜なるいたづら、讀みて頭を解かざる者なげむ、夏目漱石氏の  
「猫」に感服せし人々は必ずや此書を経きて多大の興味を感受すべく、實に近來稀に見る珍書と  
▲「新佛敎」曰く、實に面白い、讀んで吹き出し、又讀んで吹き出す、實に奇想天外より來る底のも  
の、讀んで云ふと雖も文章輕妙にして譬句に富み、全く離離れが漱石か楚人冠位だ  
して居る。今日の日本の文壇で、この位のものを書き得る者は、まづ漱石か楚人冠位だ  
▲「笑」曰く、本端の繁きいたづらは愈々奇抜になり、面白きこと限りなし。記者も之を讀み行  
くうち自然の失笑を禁じ能はず、傍人より何がそんなに面白きかと問かれたり。近頃珍らしき愉快  
なる書と云ふべし。

版三第

譯軒柿高日・著原ダイウ

譯批報朝萬

# フランダーズの犬

本書は數月前伊太利に窮死し、僅かに其の一忠婢と數頭の  
犬猫とによりて哀悼の誠を致されたる薄倖不遇の閨秀作家  
ウイダ(本名ルイス・デ・ラ・レミイ)女史が一代の傑作にし  
て現下歐米の各新聞雜誌は、筆を揃へて之を激賞し、世界  
最良圖書百卷の一に數ふべきを云ふものあり。實に世の貧  
しき者弱き者に對して賤がれたる作者の同情熱誠は、滾々  
として紙上に漲ぐ、殊に忠犬が孱弱き主人公を慕ひ、自ら  
安樂を捨て、死地に就くのあたりは、試に五六の少年少女  
をして讀ましめたるに、よく一人の泣かざるものあること  
なし。譯文また流麗暢達。動物愛護の情を養はしむる上に  
多大の貢獻あるべきを信じて疑はず。是れひとり少年少女  
の健全なる家庭讀本として推薦すべきのみならず、又贈物  
用として甚だ妙なる可し。

錢四稅郵・錢五拾貳金價定

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元版

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元版







268  
514



